

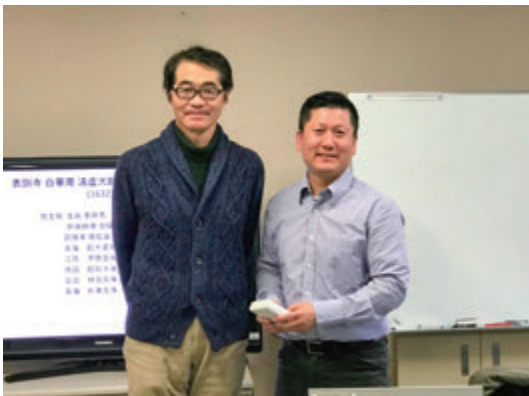


浄土でのお引き合わせ：初めての 日本長期滞在

Kim Sung-Eun
(ブリティッシュ・コロンビア大学)



朝鮮仏教の研究者として、私は朝鮮という狭い分野にばかり目を向け、日本にはあまり触れたことがありませんでした。今回の短い旅で私は日本の大学を初めて訪れたのですが、快適な環境で実に多くを学ぶことができました。学術的な意味での学びというよりは、深い気づきを得たと同時に、仏教研究における私の方法論的アプローチが間違っていなかったと確信できたという意味での学びでした。こうした機会を持てましたのは、ひとえに神奈川大学非文字資料研究センターのおかげです。本当にありがとうございました。



神奈川大学非文字資料研究センター・小熊センター長から記念品を贈呈された。

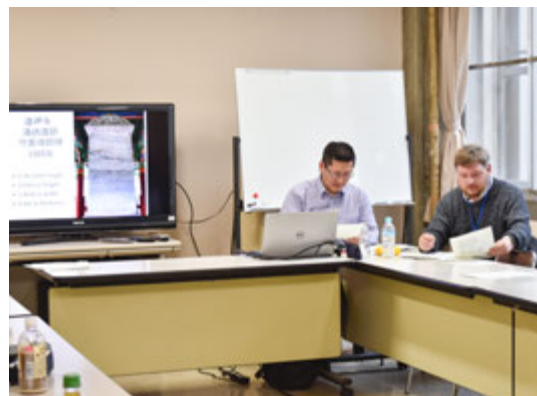
今回の旅は、李氏朝鮮時代（1392-1910）の仏教研究に対する私のアプローチを検証するためのものでした。李氏朝鮮の仏教美術を理解する上で、一般庶民の暮らしのなかで仏教がどのように実践されていたか、どの程度の仏教活動があったかということが非常に重要だというのが、その理由です。このアプローチは大きな成果をあげましたが、それは、李氏朝鮮時代の仏教僧のなかに仏教の正統な系譜 (the tradition) を表す人物がいなかったからです。

仏教研究では経典や教義のほかにも注意を向けることが重要だと私は確信していますが、この確信は、文字以外の文化財を抛り所にして研究をすすめている非文字資料研究センターを訪問したことでいっそう確かな

ものとなりました。このアプローチでは、大多数の人々に最もなじみがある資料に注目しようとしているのです。文字資料はしばしば人々を二分し、研究対象として読み書きできる人々だけに光をあてる結果になり、文字資料が大多数の人々を置き去りにしていることを考えると、こうしたアプローチが取られるのは自明のことです。私自身も、李氏朝鮮時代の仏教の調査に基づき、同様の見解に達しました。先に述べたとおり、当時の仏教の最も顕著な特徴は、庶民の暮らしのなかで仏教が何らかの役割を果たしていたことにあります。当時は仏教が国家の後ろ盾を失い、新たな庇護者を探し求めている時代でありますから、一般庶民のなかで仏教が果たした役割が重要なのです。



大学院生にプレゼンする時間をいただいた。質疑応答の時間も設けられた。



現在研究している仏教石碑について大学院生に発表した。

もうひとつ深く心に刻まれた経験は、佐野教授のお招きで実現した2019年1月25日のプレゼンテーションでのことでした。途中で佐野先生から提起された「仏教石碑はどうして非文字資料なのか」というご質問は、なかでも非常に興味深いものとなりました。質問の意味するところは明白で、文字資料の持つ多面性について考えさせてくれるものでした。資料に文字があるという理由だけで、その資料の非文字性が否定されるものではありません。先生の質問に答えようとして気づいたのは、すべての研究資料にこうした多面性があり、我々は日々、この多面性を目の当たりにしているということです。

さらに、資料の多面性を意識するような問題提起がなされたことで、私は、研究方法を練り直すことができました。この方法は、ただ一般庶民が仏教をどのように受け入れてきたかを理解しようとして採用してきたものです。佐野先生のご質問のおかげで、資料の性質にもっと気を配るようになっただけでなく、研究を一般公開するなど、研究方法の持つ意味合いについても敏感になりました。

また、非文字資料への注目は最近の仏教研究ブームとよく似ており、仏教にまつわる品々の物質的特性(materiality)にフォーカスしてきました。逆に、最近の仏教研究でも、関心の大半が研究資料の外見的特徴や、



現在、神奈川大学日本常民文化研究所で調査が行われている日本のお札

具体的な形を持つモノ(オブジェクト)のなかに読み取れるものに向けられています。モノ(オブジェクト)も、庶民の宗教生活のなかで不可欠な役割を果たしてきたと認識しているのです。


最後に、私の訪問を実現してくださった非文字資料研究センターの小熊センター長にお礼申し上げますとともに、佐野教授には私が現在行っている研究について話す機会を設けて頂き感謝しております。また、センター職員の成田さんには、滞在中の研究協力についてお心配り頂きありがとうございました。センター滞在中は大変貴重な経験をさせて頂き心より嬉しく思っています。近いうちに日本に戻って来たいと思っています。

コラム 派遣研究員レポート

名前	派遣先	派遣期間
蔣 明超	北京師範大学文学院 民間文学研究所	2018年10月10日 ~ 2018年10月26日

素晴らしき知行合一の旅

—— 北京師範大学派遣記録



蔣 明超
(歴史民俗資料学研究所 博士後期課程)

筆者は石敢當の研究をしている。「石敢當」というと、一般的に道路の突き当たりなどに設置される魔除けや厄除けのための石造物を思い出す。史料に記録されている最古の石造りの石敢當は、宋代の学者王象之が撰した『輿地紀勝』に記載がある唐大曆5年(770年)、福建莆田県県庁にあったものである。それ以前の石碑の石敢當の記録がないため、「石敢當」という石造物は唐代中後

期に出現したと考えられている。しかし、「石敢當」はもともと石造物ではなかった。紀元前40年頃、前漢時代の史游が撰した『急就篇』に、「石敢當」という文言が最初に登場した。この文言の「石敢當」がどのような経緯で石造物の「石敢當」になったのか。果たして両者の間には必然的な関係があるのか。そのような疑問点を調査すべく、2018年10月10日から10月26日まで、